

新潟県、柏崎刈羽原発の事故での避難先を初めて提示 避難ルート、移動手段など依然として課題山積

県防災会議原子力防災部会は3日、東京電力柏崎刈羽原発の事故を想定した住民の広域避難についての行動指針素案を公表しました。

この素案では同原発から30キロ圏内の9市町村について、それぞれの避難先候補を明らかにしました。上越市の場合、柿崎区の全域、吉川区、大島区、大潟区、浦川原区の一部にすむ約1万6000人の人たちを糸魚川、妙高の2市、または魚沼・湯沢方面の魚沼市など4市町に避難する案となっています。

これまでどこへ避難したらいいのかまったく示されていませんでしたので、避難先が示されたのは一歩前進です。しかし、どういうルート

で、どういう移動手段を使うかなどについては明確にされておらず、このままでは具体的な避難計画を立てるわけにはいきません。

先月の中旬、民間団体「環境経済研究所」が明らかにした試算(写真上)では、原発で事故が起きた場合、30キロ圏内の住民全員が避難するには渋滞激化などにより、最長で6日もかかるとされています。柏崎刈羽原発では、国道のみ使用の場合、2日と18時間余りかかるとされています。

東京電力では今年の7月から順次、原発を再



【レンゲツツジ】春の山でだいたい色の花を咲かせるレンゲツツジ。いま、数か月後の出番を待って、準備をしています。今年は暖冬の影響もあって、いつもよりも早くふくらんできているように見えます。写真は吉川区神田町にて撮影。

稼働させたいとして動いていますが、避難問題ひとつ考えただけでも、柏崎刈羽原発は再稼働させられないですね。(上の地図は新潟県作成のものです)

党議員団、談合疑惑解明申し入れ

日本共産党議員団は先月30日、ガス水道局発注本支管工事の談合疑惑解明の徹底を求める申し入れを談合情報等調査委員会(宮越浩司委員長)に行いました。

申し入れは、先般の中間報告について、「このたびの疑惑を解明するに至るものではなく、このままでは市民の納得を得られない」として、さらなる調査・聞き取りを求めることが内容となっています。申し入れに対して宮越委員長は、「与えられた権限の中で調査してまいりたい」「告発するに足りる状況であることが明らかになった場合、あるいはこちらの調査で解明しきれない場合は、公正取引委員会または捜査当局に告発あるいは捜査要請を行うことも視野に入れて」といった趣旨の発言をしました。今後の動きに注目したいと思います。



またしてもナナトリが見えるところで母の昔話が始まりました。ナナトリというのは吉川区尾神にある地名で、正式には国造山（こくぞうやま）と言います。ここは県道川谷十町歩線、名木山地内からよく見えるのです。

先日、母が大島区板山に住む友達や伯母に会いたいというので、この道を通って車で送って来ました。今冬は暖冬ですが、この日も暖かい日でした。丸滝橋を過ぎた頃から、「あれだねかや、じちや、あこで炭焼きしてたがだ」と話しはじめました。

この日、母が語ったことのなかには初めて聞いたことがいくつもありました。その筆頭は、ナナトリにはわが家の畑だけでなく田んぼもあったということです。あそこは急斜面の多い山です。稲を植えるだけの面積をよく確保できたものだと思います。それに、田んぼをやるだけの水があったとは……。

母によると名木山の「みね」（屋号）の人がわが家の田んぼをほしいと言つて来て、私の祖父・音治郎は、そのかわりに雑木林を分けてもらったとのことでした。

「あれには儲かった」祖父はそう言っていたとのことですから、山を分けてもらったおかげでいっぱい炭焼きができたのでしよう。

母が蛸場からナナトリの山を越えて川谷の店や教員住宅まで歩いて行き、ナメコを買ってもらったことがあるという話も初めて聞きました。「とちやがズドンと切った木にナメコがバカいっぱい出ちやって食いきれねかつたがど。それで、売りに行くこうという事になったがど」と母は言つて笑いましたが、父が切り倒した木はどれくらい大きな木だったのか。

「教員住宅へ行つたら、岩佐の先生が口元にいなつたがど。そこで、そこにはごつおしのおんなしよ（女衆）がいなつて、ナメコのおつゆして食べられるそつて喜んでくんつた」そのころは道はどろんこでいい道じゃねかつたすけ、岩佐の先生も泊まつていなつたがど、どんな先生方がおられるか母は心配もしたのでしようが、親戚の先生がいたことで、安心してしゃべっている母の様子が想像できました。母がシイタケを売るためにバスに乗つて大瀧町まで行つた話は聞いていましたが、川谷の方面まで行商に行つたとはびっくりでした。

ナナトリから山の中腹にある細い道を下つて石谷に出て、そこから板山へと行つた話も聞きました。板山には伯母が嫁いだ「あいざわにし」（屋号）があります。母の姉妹が住んでいるところとしては一番近い家です。「板山のおとちやが亡くなつて手が足らんすけてがで、石谷から登つて行つたがど。そしたら、『いんきよ』（屋号、大島区竹平にある家）のあねちやが休んでいなつた。あーら、おまさんだねと云つて、そこでひとしきりしゃべつたがど。板山へ行くまでには、サワナとフウキがいっぱい出てた」と母はしゃべり続けました。

話を聞きながら思つたのは、母がとても行動派だということです。板山へ田植の手伝いに行くにしても、山を二つも越えて行かなければなりません。田植え仕事が始まるまでに到着するには夜明け前の暗い時間帯に出なければなりません。よく歩いて行つたと思います。

板山には家から三五分ほど着きました。母を迎えたのは、母の幼友達である「すぎ」（屋号）のかちやです。「さあさ、入つてくんさい」と言われ、冬の出入り口から家の中につつと入つていく母の後ろ姿からはうれしさが伝わってきました。

いま、保育制度、保育所が大きく変わろうとしています

若いお父さん、お母さんが安心して仕事に出ることができる。子どもが健やかに育っている。こういう条件をつくるのは政府や市町村の大事

な仕事です。だから児童福祉法では、親の申し込みがあれば、“子どもは市町村で保育しなければならない”となっているのです。

ところがいま政府は、待機児童対策のためとあって、保育制度を変えて「子ども・子育て新システム」をつくらうとしています。「新システム」では、市町村の保育の義務をなくし、保育園探しが親の「自己責任」にされます。申し込みも保育料の支払いも直接施設になるため、手のかかる子や低所得家庭が、別の理由で断られる恐れもあります。

また、「新システム」は、株式会社の参入を促進し、運営費からの株主配当や利用料の上乗せ徴収を認めるなど、財界が求めてきた保育の「市場化」「営利化」に大きくふ

みだすものです。働く親の生活を支え、乳幼児の生活と成長の場である保育・幼児教育に、施設運営の不安定化、保育条件の低下、保育環境の格差拡大をもたらす仕組みを導入することは、絶対に許せません。

いま上越市内には公立保育園44園、私立保育園18園、地域保育園4園、合計で66の保育園がありますが、こうした国の動きと軌をいつにして市立保育園の「民間移管」の動きも出てきました。しっかりと議論していきたいと思ひます。

写真は先日視察した東城保育園です。



上越地域各消防署における空間放射線量測定結果（測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。消防署によると、通常の範囲は1時間当たり0.016~0.16μSv（マイクロシーベルト）だということです。

	1月29日(水)	2月5日(水)
上越南消防署	0.030	0.036
上越北消防署	0.053	0.053
新井消防署	0.050	0.050
頸北消防署	0.060	0.070
頸南消防署	0.047	0.040
東頸消防署	0.050	0.056
高士分遣所	0.043	0.047
名立分遣所	0.047	0.053